

令和6年度 加茂小学校 学校安全総合支援事業報告

長野市立加茂小学校

1 はじめに

加茂小学校は長野市の北西部に位置し、全校児童 202 名の学校である。学校は、河川の氾濫危険区域にも土砂災害警戒区域にも入っていないが、学区には土砂災害警戒区域がかかっている地域があることと、地震の災害も考えられるので、児童には災害に備え、考えて行動する力を育てる必要がある。本校は、ここ数年続けて学校安全総合支援事業を活用している。主に信州大学の廣内大助教授の助言を頼りに防災減災学習を進めてきた。

昨年度、県の学校安全表彰を受け、今年度、文部科学大臣表彰を受けた。令和4年度の4年生（現6年生）の防災学習の取組が中心となっており、廣内先生に教えていただきながら取り組んだこと、他の学年も防災学習に取り組んでいること、加茂小隊の皆さんが毎日の登下校を見守ってくださっていること、PTA校外指導部さんを中心に安全マップを作っていること、学校が点検や避難訓練を計画的に行い安全についての取組をしていること、保健だよりで健康や安全について啓蒙していること、児童会で廊下に標語を貼ったペットボトルを置いて安全な歩行を呼び掛けていること等、たくさんの取組を認めてもらった結果と考える。多くの人の気持ちや努力が認められた。

取組の成果としては一つの区切りになった。これを継続していくが、昨年度から来年度にかけて校舎の長寿命化工事が行われており、学校安全の体制づくりに配慮しなければならないことがあるため、今年度はできることを継続しつつ、体制作りを中心に事業を活用した。



2 学校安全総合支援事業の活用について

(1) 信州大学 榊原 保志 特任教授 の助言から

ア 今年度加茂小学校の防災減災学習についてのアドバイス

- ・今年度第一地区住民自治協議会が、避難所開設訓練を計画していることを教えていただく。第一地区と連携した学習もよいとアドバイスをいただいた。→早速第一地区と防災訓練について相談をしたが、今年度は休日に計画をしているため、相談して来年度以降、一緒にできることを模索していくこととなった。第一地区は、松代

の避難所開設訓練も見学したとのこと。

- ・加茂小学校の今年度の取組について助言をいただく。「Field On!」を使って昨年度のように学習してもよいし、新しい事に取り組んでもよい。いつでも自分で身を守る力を育てることが重要。地域との連携を生み出していくのもよいと助言をいただいた。→今年度は、長寿命化工事でできないことも多いため、授業としては4年生の社会科としての防災学習、5年生・6年生の理科での自然災害の学習と低学年の防災減災プログラムの学習に決定した。榊原先生には、長寿命化工事で校舎の配置や動線が変わることを受けて、危機管理面の助言をいただくことをお願いした。

イ 加茂小学校災害時の危険回避に関する指導

- ・実際に校舎、プレハブ校舎、敷地内を歩きながら助言をいただいた。引っ越しにより棚等の固定が外れることがあるので、確認をしておくこと。プレハブ校舎と渡り廊下との動線が悪くなるので、避難路について検討をする必要があること。何度か引っ越しをするので、その都度自分がどのように避難するのか訓練又は確認を行うこと。→榊原先生の指導・助言に従って係の活動を行った。

ウ 地域の避難所開設訓練に関わって

- ・防災学習として避難所開設の様子を見させてもらう方法もあること。学校が実際に避難所になった場合、地区が主体となって避難所を運営し、学校が協力する形になる。3日間は学校が協力し、その後は授業再開に向けた取組へ向かっていく。いざという時に貸し出せる部屋、机等を決めておくことよい。→今後、引っ越しを経て準備していく。
- ・学校が避難所開設に協力することを考えると、クロスロードゲームというワークをするのもよいと助言をいただいた。避難所に起きそうな問題についてどう考えるかみんなで話し合うワークである。(第一地区が見に来ているとのこと。)→教頭会で経験した。今後学校の職員研修として行ってみようと思う。

(2) 緊急時引渡し訓練の職員訓練から

コロナ禍以降数年、本校では引渡し訓練を実施できていない。(1)の榊原先生の御指摘にもあったことと、現在長寿命化工事が行われており、通常と違う環境になっている(グラウンドにプレハブが建っており、渡り廊下でつながれている。工事エリアのため、正門から入ることができなくなっている等)ことから、いざ事件や災害で保護者への引渡しをすることになった場合に混乱が生じることが予想されるため、工事期間中であることを中心に考えた引渡しの方法について研修及び訓練を行った。



その他、迎えに来る途中や後に災害に巻き込まれる場合もあること、市や県と連携して引き渡すかの状況判断をすることについても教わった。

1で述べたように、本校は、水害や土砂災害については差し迫った危険区域ではないが、地震については、いつ発生し災害に見舞われるかはわからない。避難訓練では、火災と同じように地震についても想定して訓練を行っている。1・2・3年生に防災減災学習の意識と必要感が芽生えるように実施をした。考える順番やキットが用意されているので、取り掛かりやすく、自分や友達と考えながら学んでいける学習となった。1・2年生には、自然災害を生活の中から見つける内容と、大地震の時には何に気を付けてどんな行動をとるとよいのかを考えるプログラムを実施していただいた。

3 成果と課題

今年度、文部科学大臣表彰を受けたことで、実践を積み重ねることや、もしものための準備を丁寧に行っておくことの大切さを実感した。また、今年度は、長寿命化工事の影響で危機管理の面で変化が起きることが予想される中、榊原先生に実際に立ち会っていただいて指導・助言をいただいたことで、取り組むべきことが見えたり、安心して取り組むことができたりしたのでよかった。今後、危機管理の面と、子どもたちの学びの面と両輪で防災・減災に取り組んでいきたい。

4 おわりに

来年度から、生活科・総合的な学習を中心に探究学習を多く取り入れようとしている。1年生からの6年間学習する間に、地域のことや自分たちのことを学ぶ機会が増えるが、できるだけ今まで積み重ねてきた安全や防災減災に係る学習を位置づけていきたい。日赤の防災・減災プログラムを活用して子どもたちの意識を高めたり、「Field On!」を活用した調査学習をきっかけに探究学習をしたりして加茂小学校の学習の形を創っていききたい。また、今年度、学校安全に関わって文部科学大臣表彰をいただいたことを地域とも共有して、地域とともに考える防災・減災学習に発展していけたらよいと考えている。今年、地域では避難所設営の体験を休日に実施した。ここには、今年お世話になった信州大学の榊原先生がアドバイザーであるため、この縁も活かして活動を創り上げていきたいと考えている。

(文責 教頭 丑澤 智成)

学校安全総合支援事業の取組について

—児童が自分ごととしてとらえ、目的意識をもって学ぶ防災学習—

長野市立吉田小学校

1 はじめに

吉田小学校は、今年度で開校 151 年目を迎えた歴史ある学校であり、各学年 3～4 学級、特別支援学級 6 学級の全校 26 学級、全校児童数 644 名（令和 6 年 10 月 1 日現在）の大規模校である。

市内の小学校では 2 校だけの「肢体不自由学級」を有しており、南校舎及び体育館棟にはエレベーター、全てのフロアに多目的トイレが設置される等、バリアフリーの環境が整っている。万が一の大きな地震や火災発生時に備え、車椅子や歩行のための補助装具を装着した児童の避難については十分に配慮し、経路や職員分担、対応等、細かい部分まで共通理解を図っている。しかし、敷地のすぐ横を浅川が流れ、学校の敷地全体が 0.5m～3m の浸水危険地域に位置していることや近年日本の至る所で起きている集中豪雨による災害や落雷による事故に備えた防災教育、児童自身が自分の命を自分で守る意識を高めるための教育が喫緊の課題となっている。

2 吉田小学校の防災体制について

(1) 運営方針

校内生活及び校外生活において、災害や不審者からの安全確保について、自分ばかりでなく、他の人の安全にも留意をして生活できる児童の育成を目指して、指導の徹底を図るとともに、施設・設備の安全管理に十分留意し、事故のないようにする。

(2) 安全対策

ア 年度当初に行うこと

- ・ 防護団組織づくり、各教室への防犯ブザー・護身棒配布、避難経路図の作成掲示、安全マップの配布や掲示、危機管理マニュアルの見直し・作成と職員への配布

イ 定期的・継続的に行うこと

- ・ 校舎内外の安全点検（毎月 1 回の一斉安全点検）
- ・ 遊具及び敷地内点検（教頭や体育係が行う）
- ・ 消火器、防火扉、火災報知器、緊急火災・地震放送設備、ガス感知器等の点検
- ・ 昇降口の扉閉め ・ 渡り廊下の防雪、凍結対策 ・ 暖房器具の管理
- ・ 学区内の危険箇所の点検（交通安全と不審者対策の面から）

ウ 避難訓練・防災学習

- ・ 4 月 11 日（木）「第 1 回避難訓練」

※地震による火災を想定。基本的な避難経路の確認を目的とした訓練

- ・ 5月10日（金）「集団下校訓練」

※台風接近や有害獣からの危険を回避するためといった場合に行う地区ごとの班で集団下校をする訓練

- ・ 6月13日（木）「休み時間に火災が起きた場合の訓練」

※様々な場所にある緊急時避難場所から、担当職員や6年生誘導で避難する訓練

- ・ 9月3日（火）「防災訓練（学習）」

※本年度は急な天候の変化に対する対応について学年毎に映像を見て学習した

- ・ 3年に1度、9月中「緊急時引渡し訓練」（本年度は実施なし）

※大きな災害を想定した3年に1度のドライブスルー方式の引渡し訓練

- ・ 10月2日（水）「防犯訓練」

※警察署スクールサポーターの方による不審者への対応の仕方の講話

エ 本事業に取り組むまでの本校の様子

- ・ 雷への対応については、学校長から校長講話で児童に話があった。落雷の危険を避けるため下校時刻を遅らせる措置をとったことや水泳学習を中止する等の対応をしたことはあったが、十分に時間を確保して雷に関する指導をしたことはなく、雷に対する児童の危険意識もあまり高くない様子が見られた。
- ・ 水害に関する避難訓練はこれまで実施しておらず、吉田小学校が浸水危険区域に属していることを知っている児童や職員は少ない。

3 本事業に取り組むきっかけ

今年度、本校は「M・・・モチベーション（目的意識をもった深い学び）」「R・・・リスペクト（自他を大切に作るしなやかでたくましい体）」「P・・・プライド（地域と繋がった学びの充実）」の3つを重点としている。

以前から本校児童については、課題に対して真面目に取り組むことができる反面、学ぶ事への目的意識が低かったり、学習に対して受け身の傾向が見られたりするため、改善していく必要があることを感じていた。

また、近年、日本各地で頻繁に起きている自然災害に備えた学習や訓練を行い、児童に「自分の命は自分で守る」という意識を育てることが必要だと感じていた。

そこで、児童の実態と吉田小学校の立地を考え「雷」と「水害」に関する防災学習を専門の方の力をお借りして企画することで、児童の「目的意識をもった深い学び」「地域と繋がった学びの充実」へと発展させていきたいと考えた。

4 長野地方気象台 松川 基 先生による「雷についての防災学習」の実施

（9月3日 全校児童参加 TV放送にて実施）

1・2年生向けと3～6年生向けに分け、1時間ずつ「雷についての防災学習」を行った。事前に全学級で「雷について知っていること」や「落雷への対応の仕方」等について児童が考える時間を設けたため、当日は非常に興味関心を高めて学習に取り組むことができた。児童の実態や学習内容について事前に何度も担当の方との情報交換や打合せを行い、発達段階に応じた情報量や説明の仕方を工夫していただいた。ミニドラマやクイズを入れながら説明してもらったこと、暑さを考慮して各教室でTV放送を見ながら学習した

ことも、児童が集中力を切らさず学習に取り組むことにつながった。



放送室でパワーポイントを使って説明
する長野地方気象台 松川アドバイザー



知らなかった雷の性質やより安全な対応
の仕方について真剣に学ぶ3年生児童

【児童の感想より】

- ・積乱雲が近づいてきたらすぐ避難しなくちゃいけないのがわかった。雷の正体は静電気だったことを知った。これから雷が聞こえたら、建物の中に入る。
- ・雷は金属に落ちやすいって思っていたけど、この学習を通して関係なく危険ということがわかった。急につめたい風が吹くと、雷がちかづくサインだということを初めて知った。
- ・雷によって多くの被害者が出てしまうことがわかった。家族にも改めて、雷について学んだことを報告しようと思った。
- ・雷から離れていれば安心と思っていたけれど、そうではないことを知りました。

5 信州大学防災教育センター 内山 琴絵 先生による「水害についての防災学習」の実施
(9月18日 全校児童参加 多目的室参集にて実施)



千曲川の決壊の様子や水害に見舞われた
家屋の写真を見て驚く子どもたち



具体物を使い「吉田小にはどの高さまで水
が来ると思う？」というクイズを出題

「水害についての防災学習」は 1・2年、3・4年、5・6年に分けて行った。令和元年の「猪の満水」で千曲川が決壊する様子を実際の映像で見たり、吉田小が最大3mの浸

水区域に属していることを具体物で示しながら説明してもらったりしたことで、児童が水害の危険は身近にあり、決して他人ごとでないことを実感することができた。

3年生以上には地形図やハザードマップ、航空写真等を見せながら、5・6年生には吉田地域の水害の歴史を紹介しながら説明してもらったため、児童が水害を自分ごととしてとらえることができたり、地域への関心を高めたりすることができた。

水害へのより安全な対応については、できる限り早い段階で保護者へ児童を引き渡す判断をすること、水平避難で安全な場所に逃げるのが大切であり、垂直避難はあくまでも最終手段であることを説明してもらった。「垂直避難をした場合、かなりの確率で電気の供給がストップし、冷暖房もトイレも使えない真っ暗な状況に全校児童と職員が取り残される危険があることやゴムボートやヘリコプターといった救助方法では1人ずつしか救出できないといったデメリットを説明してもらい、児童の感想には「水害の怖さを知った」「家で家族と一緒に安全な避難の仕方を考えたい」という内容が多く見られた。

また、職員もこれまで水害に対して安易に考えていた自分自身を見直すことができた。

【児童の感想より】

- ・水がたまるとあんなふうになるんだっておもいました。夜になったらこわくて、心配だなあっておもいました。
- ・あの浅い川、浅川が氾濫したらって事は全然想像できなかった。水が300cmの高さまでくるのはすごいびっくりした。川が氾濫したら高い所へ行くだけではダメだと初めて知った。勉強になった。
- ・浅川は昔は電車の線路より上を流れていたなんて思いもしなかったから驚いた。家でお父さんやお母さんと避難場所を話しておきたいと思った。
- ・高いところに逃げることも大切だけど、とりのこされてしまうと大変だから、あらかじめ「ここに行く！」ときめておくことが大切だとわかった。

6 事業の成果と今後の課題、まとめ

- 本校が3年に1度実施することとしているドライブスルー方式の引渡し訓練について、その必要性を強く感じる事ができた。来年度は訓練の実施年度となるので、目的や想定を地域や保護者と共有し、地域全体の防災意識を高める役割を果たしたい。
- 雷についても水害についても、子どもたちの命を守るためにできるだけ早い段階で判断をすることが重要ということだった。今後もアドバイザーの方の意見を聞きながら、早めに判断の基準を明確にしていく必要があると感じた。
- 今回、児童も職員も吉田地区に関する貴重な学びができた。今後は社会科や総合的な学習の時間等を通じて、より地域に目を向けた学びを充実させ、児童の学習意欲を高めることに繋げていきたい。また、難しさは多々あると思うが、地域の方や近隣の学校、幼保育園、公民館等と連携した防災訓練や防災学習を行えるような方法を考えていきたい。

(文責 教頭 高橋 俊)

学校安全総合支援事業の取組について

長野市立長沼小学校

1 はじめに

長沼小学校は千曲川水系に位置し、校区に広い果樹園（主にりんご）がある。令和6年度の児童数は77名である。令和元年度の台風19号の際、千曲川堤防が決壊し、浸水している。

2 長野市立長沼小学校の防災教育について

長沼小学校では被災以降、カリキュラムの中心として防災教育に取り組んでいる。大きな学習機会として、長沼防災の日を設定しており、学習発表、水平避難訓練、体験学習を3年サイクルで実施している。本年度は、学習発表にあたる年で、各学年で取り組んだことや学習したことを他学年に発表し、共有した。その成果について地域住民に向けて学習発表を行った。

また、被災してから5年目を迎え、被災当時のことを知っている児童がほとんどいなくなっている現状があり、防災教育の転換が必要になってきている。これまでは復興や児童の心身のケアを第一に考えてきたが、今後は持続可能なカリキュラムの構築や地域とともに学ぶ防災教育を考えていきたいと考えていた。

その転換として、本年度は主に「避難訓練の内容の変更」と「地域に向けた学習発表」を行った。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 日本赤十字社長野支部による出前授業

ア 低学年に向けての出前授業

1・2年生向けの出前授業を行った。1・2年生は地震についての防災学習からはじめ、他の災害に広めていくことをねらっている。地震発生時の教室や町の様子をイラストを用いて予想し、講師の方にアドバイスをいただいた。



イ 職員の研修としての出前授業

職員の異動を見越して、職員が防災についての知識をもったうえで指導に当たれるようにしたいと考えたため、防災学習の研修が必要と考え、避難所運営ゲーム (HUG) を実施した。職員間でも意見が分かれる部分があったため、深い学びになった。災害発生時の基本的な考えなどを知ることができた。

(2) 県庁危機管理防災課の出前授業

4年生の社会科学習で「公助」「共助」について学ぶため、出前授業を活用して避難所運営ゲーム (HUG) を実施した。自分なりの考えをもって配置をしていく姿が見られた。避難所運営の難しさを知った子どもたちは、混乱する避難所内で助け合うことが大切だということを学んだ。



(3) 廣内大助先生による御指導

避難訓練の改善や防災管理の御指導をいただいた。2回目の避難訓練を参観していただき、助言をいただいた。地震発生を想定して行った避難訓練から、地震の揺れをベルに見立てるタイミングや、特別教室の地震への備えについて御指導いただけた。避難訓練の計画書の修正や、校内掲示、備品の用意につながった。

また、長沼防災の日の学習発表会も参観していただき、学年ごとに助言と講評をいただいた。子どもたちにとっては肯定的な評価をもらう機会となり、職員は防災教育についての視点を示唆していただく機会となった。





4 事業の成果及び今後の課題

長沼小学校の防災教育の課題は、地域とどのように関わる防災教育ができるかであった。廣内先生の御指導を受け、地域の方から話を聞いたり、家族に調査したりして学習を進めていくことができた。昨年度、地域の方とともに体験学習をする企画を行ったが、講師としての立場に関わるにとどまり、ともに学ぶ場面はつくれなかった。今年度は、地域の方から被災について教えていただく機会をつくり、学習発表会当日は、地域から昨年度を超える参加者が多く見られた。

自然災害はいつ何時起こるかわからないが、防災については事前にできることや、覚えておくといざというときに生かせることが多いため、学校と地域の連携が不可欠である。

また、職員が異動しても防災学習が引き継がれていくように、避難訓練の改善を行い、例年と違うやり方で実施することができた。この避難訓練も前年度踏襲にならないように数年のサイクルをつくり、実施していく方向性ができてきた。

今後の課題は、本年度行った事業を引き継ぎ、来年度以降もカリキュラムとして実施していけるようにすることである。発達段階に応じた学習の機会を年間スケジュールの中に位置づけていく必要がある。そうすることで職員の異動があってもつながっていく長沼小学校の防災教育をつくっていきたい。

(文責 教諭 小田切 洋輔)

学校安全総合支援事業の取組について

— 塩崎地区の水害から学ぼう —

長野市立塩崎小学校

1 はじめに

塩崎小学校は、長野市の南部にあり、JR 稲荷山駅の東側に位置する、全校児童 224 名の中規模校である。今年度から信更地区の児童も通うようになり、学区は、信更地区と、塩崎地区の北東の東篠ノ井地区から南西の長谷・越地区まで約 8 km と大変広く、千曲川沿いに住宅や田畑が並んでいる。2019 年（令和元年）の台風 19 号では、千曲川及び岡田川の越水によって、児童宅を含む地域の住宅の一部に床下浸水等の被害があった。台風 19 号の被害から 5 年が経ち、当時の地域の様子を知る児童も少なくなっているが、水害の被害に遭ったことを風化せず、防災についての児童の意識を高めたいと考え、本活動を実施した。ここでは、主に 6 年生の取組を紹介する。

2 本校の水害時の防災体制確立の判断時期及び役割分担

体制確立の判断時期	体制	活動内容	対応要員
以下のいずれかに該当する場合 ▶ 大雨警報（浸水害）・洪水警報発表 ▶ 大雨又は台風に関する気象情報発表 ▶ 教育委員会からの連絡または氾濫注意水位到達（1.60m） ▶ 聖川及び佐野川・荏沢川上流域キキクル、水位情報、雨量等注意	注意体制 確立	1 洪水予報等の情報収集 2 使用する資器材の準備 3 家族への事前連絡 4 周辺住民への事前協力依頼 5 保護者への連絡、児童の引き渡し	1 情報収集伝達要員 2 避難誘導要員 3 情報収集伝達要員 4 情報収集伝達要員 5 保護者への連絡要員 6 児童・生徒引き渡し要員
以下のいずれかに該当する場合 ◆塩崎地区に高齢者等避難（警戒レベル3）発令 ◆千曲川に氾濫警戒情報発表 ◆千曲川（杭瀬下観測所）避難判断水位到達（4.0m） ◆聖川及び佐野川・荏沢川上流域の洪水キキクル、水位情報、今後の気象情報等で氾濫が見込まれると判断	警戒体制 確立	1 避難等の情報収集 2 使用する資器材の準備 3 家族及び関係者へ避難開始連絡 4 周辺住民への協力依頼 5 要配慮者の避難誘導	1 情報収集伝達要員 2 避難誘導要員 3 情報収集伝達要員 4 情報収集伝達要員 5 避難誘導要員
以下のいずれかに該当する場合 ◆塩崎地区に避難指示（警戒レベル4）発令 ◆千曲川に氾濫危険情報発表 ◆千曲川（杭瀬下観測所）氾濫危険水位到達（5.0m） ◆聖川及び佐野川、荏沢川上流域の洪水キキクル、水位情報、今後の気象情報等更なる情報を収集	非常体制 確立	1 施設内全体の避難誘導 2 要配慮者の避難完了 3 家族及び関係者へ避難完了連絡	1 避難誘導要員 2 避難誘導要員 3 情報収集伝達要員

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学習のはじまり

6月18日 修学旅行で『そなエリア東京』を見学し、地震が起きた時にどうすればよいのか、避難する時にどんな事に気をつければよいのか、地震災害後の支援が少ない時間をどうしたらよいかなど、防災体験をしながら生き抜く知恵を学ぶことができた。自分の住む地域でも災害が起こった時にどう避難するか考え始めるきっかけとなった。

(2) 事前打ち合わせ

8月22日 信州大学教授廣内大助先生と打ち合わせを行った。近隣の小学校の過去の実践例を教えていただき、信州大学で開発した防災教育用アプリ「Field On!」を活用しながら、子どもたちが実際に地域を散策し、危険個所を探して入力し、地図にまとめる活動（防災マップ）についてご指導いただいた。

(3) アプリを使ってみる

9月24日 信州大学防災教育センター倉澤さんから「Field On!」の使い方を教えていただいた。子どもたちはタブレットをもって実際に学校内を歩き、危険個所を入力し、校内安全マップにまとめた。

(4) フィールドワーク

10月16日 子どもたちが学校の周りを歩き、「Field On!」を使って、水害時に危険になる所を探した。学校の東側の地区では、川が近いので水害の危険が高く、学校の西側の地区では川から離れるので水害の危険性は少ないことがわかってきた。

(5) 塩崎地区の被害状況について

6年生は台風19号による水害の時は1年生だったこともあり、あまり記憶に残っていない児童が多かったが、中には、自分の家が被害に遭い、片付けが大変だったことを記憶している子どももいた。そこで、友だちの話をもとに、家の人や地域の方に当時の話を聞いて、5年前の塩崎地区の被害状況について調べた。

(6) 災害が起こった時には

10月21日 松代復興応援実行委員の曲尾さん・西澤さんに、実際に地震や水害が発生した時の様子を、手作り紙芝居で読み聞かせをしていただいた。また、防災すごろくを体験しながら、自分だったらどうしたらいいか考えた。

(7) 防災ポーチ作り

災害が起きた時に避難する際に、自分が少しでも落ち着くものを持っていくといいことを知った子どもたちは、防災ポーチに何を入れるかを考えた。

(8) 学習してきたことを発表

11月15日 学校と地域で共催した廣内先生の講演会「地域と学校とで地震災害に備

えよう」の前に、6年生が今まで学習してきたことを、高学年児童・保護者・地域の方に発表した。

自分たちにできることを考えよう



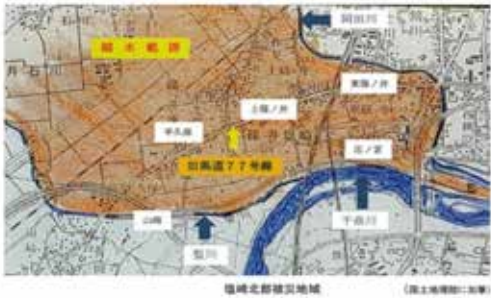
①塩崎では、台風 19 号で大きな被害をうけました。

台風19号 塩崎 床上・床下浸水被害状況					
区 名	世帯数	床上浸水	床下浸水	計	被災率
庄ノ宮	145	5	27	32	22.06
東篠ノ井	286	48	79	127	44.40
上篠ノ井	141	34	80	114	80.85
平久保	190	10	70	80	80.00
山崎	145	8	12	20	13.79
角間	122		1	1	0.82
上野	123		1	1	0.81
四之宮	350				
四野宮	112				
明戸	142				
荻谷	94				
越	191				
計	1,951	105	270	375	19.22

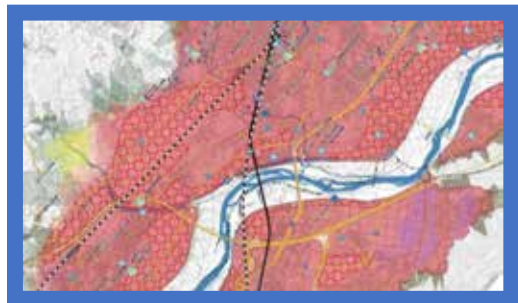
②台風 19 号の浸水被害は、床上浸水が合計 150 棟、床下浸水が 268 棟ありました。

区 名	床上浸水	床下浸水	被災率 (%)
東篠ノ井	48	79	44
庄ノ宮	5	27	22
上篠ノ井	34	80	80
平久保	10	70	80
山崎	8	12	14

③被災率の多いところから順番に、上篠ノ井 平久保 東篠ノ井 庄ノ宮 山崎 角間 上野 でした。



④千曲川の水がいっぱいになり、水門を閉められたため、聖川と岡田川の水があふれたので、学校から東側の地区の被害が大きくなりました。



⑤塩崎地区には、水害の時に安全な避難場所がありません。



⑦防災ポーチは、リュックよりも小さく持ち運びがしやすいです。



⑥もし、避難が遅れた時に救助されるまでどんなものを用意すれば良いかを松代応援復興委員の方に教えてもらいました。



⑧防災ポーチに入れておいた方がよいものは、絆創膏、ライト、ホイッスル、カイロ、冷えピタ、携帯トイレ、マスク、ティッシュ、薬、お菓子、安心できるものです。



⑨ホイッスルや携帯トイレなどは、100 円
ショップでも買うことができます。



⑩防災ポーチの中には防災手帳を入れておくといいと教えてもらいました。

(9) 講演会より

廣内先生が、実際に能登半島に行ってきた様子や、実際に避難所での生活について、写真を見ながらお話された。能登では未だに避難生活を続けている方々が大勢いて、避難所に避難すれば安心だけれど、そこではお客さんではなく、集まった人で協力して生活しなければ成り立たないこと等を見聞にもわかりやす

【児童の感想より】

- ・もし災害が起きた時には、みんなで助け合って協力することが大切だということを学んだ。いつ災害が起きても困らないように、今から準備しておきたいと思った。
- ・避難所に逃げても食べ物がたくさんあるわけではなく、ペットや小さな子どもがいる家庭は大変だと思った。小さな子どもやお年寄りを大切にできるといいと思った。

4 事業の成果及び今後の課題

今年度は子どもたちが主体となって防災学習を展開することができた。4年生では、当時の様子を覚えていない子どもも多くいたので、5年前の塩崎の様子について家の人にアンケート調査をした。そして、授業参観では、ハザードマップを見て自分の家はどのくらいの浸水が想定されるのかを調べ、家で子どもしかいなかったらどうやって親に連絡を取るのか、どこへ避難するのかなどを、親と一緒に考えた。4年生の授業参観での学びを職員研修でも共有し、さらに、塩崎地域の水害による被災の様子や、地域の方が助け合って復興してきた努力を知ることができた。

災害はいつ起きるかわからないので、5年前に塩崎でおきた水害を風化させないためにも、地域の災害記録をもとに、自分たちが今できることを考える授業は必要なことだと感じた。今後は、全校で水害を想定した避難訓練を計画していきたい。

(文責 教頭 菅沼 純子)

学校安全総合支援事業の取組について

—松代地域連携防災学習—

長野市立松代小学校

1 はじめに

松代小学校は、児童数 275 名、学級数 14、長野市東部にある松代地区の中心部に位置している。松代地区は、松代城を中心に広がる城下町である。

学校の西側には、千曲川に流れ込む神田川、東側には蛭川があり、たびたび洪水被害を受けてきた。2019 年の台風 19 号の際にも、洪水被害に見舞われた。2019 年の洪水被害をきっかけに、地域では「松代復興応援実行委員会」が結成され、2023 年からは地域防災リーダー研修会を開催している。

松代地区は、1965 年から 5 年半もの間、松代群発地震にも襲われた地域である。

2 長野市立松代小学校の防災体制について

毎年、火災・地震・水害を想定した避難訓練を年 3 回、火事・水害・地震・防犯・交通安全に関する指導や学習を年 2 回、地域連携防災学習を 1 回、保護者引渡し訓練を年 1 回実施している。令和 4 年度まで、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、消防署と連携しての避難訓練や地域連携防災学習は行うことができなかったが、令和 5 年度には実施することができた。

3 地域連携防災学習について

2019 年の台風 19 号の洪水被害から自主防災会（松代復興応援実行委員会）と連携しての地域防災学習の計画が始まった。2019 年の台風 19 号の際は、本校はグラウンドが浸水し、児童の中にも被災した家庭があった。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、計画されながらも実施できなかった地域連携防災学習は、令和 5 年度にようやく実施することができた。しかし、計画から 3 年が経過していたこともあり、児童の意識や実態から少し離れたものになってしまっていた。

そこで本年度は、4 年生の社会科や国語の学習と連携させ、毎年続けられ、かつ自分ごととして考えられる地域連携防災学習にしたいと考えた。

4 地域連携防災学習

- (1) 日時 令和 6 年 12 月 10 日（火） 5 校時
- (2) 授業学級 4 年 2 組
- (3) 単元名 「マイタイムラインをつくろう」
- (4) 単元に至るまでの流れ

ア 社会科「風水害からくらしを守る」 9・10 月

- ・学校の敷地内にある防災倉庫を見学
- ・2019 年「猪の満水」アーカイブから当時の被害状況を学習
- ・学校のグラウンドを掘り、浸水した当時の状況を感じる

(児童の感想)

「台風 19 号で校庭が川のようになったので、校庭をほって、当時のことを覚えている先生が語ってくれました。スコップで校庭をほってみると階段みたいのが出ました。当時を思い浮かべたらとても悲しくなりました。」

イ 国語科「もしものときに備えよう」 11 月

- ・一人ひとりが関心をもった災害について調べた
- ・もしもの時にはどのようなものが必要かを調べた

ウ 「防災かみしばい」に学ぶ

講師 松代復興応援実行委員会

「防災かみしばい」を中心に 2019 年の台風 19 号の洪水について、松代復興応援実行委員会の方から体験談をお聞きした。松代復興応援実行委員会の方はクラブ活動などで普段からよくお世話になっており、児童にとってはよく知っている地域の方である。

「防災かみしばい」は、2019 年の松代地区の水害を忘れず、今後に生かしていくことを目的に、松代地区の方々によって作られた紙芝居である。松代地区の方々は、水害がおきた時にも協力し合って対応をしたが、水害が起こった後にも協力し合ってその時のことを記録として残した。

児童の中には水害の記憶が残っている児童もいたが、幼稚園・保育園児ということと被害にあわずに済んだ家庭が多かったことから、今回の紙芝居で多くのことを学ぶことができた。

紙芝居の後には、当時の体験、避難所の様子、地域の様子が語られ、児童は洪水が身近な災害であることを実感することができた。また、災害が起こった時には、自分と大切な人の命を守るために必要なことについて考えるきっかけとなった。

(5) マイタイムラインを作ろう

自分の家にいるときに、洪水情報が流れたことを想定し、マイタイムラインづくりを行った。授業の前には、家庭学習で、あらかじめ図 1 のプリントを基本情報として作成しておいた。授業の冒頭で、東京法令出版の方による警戒レベルの説明を聞いたのちに、マイタイムラインづくりを行った。



「大切な人の命を守るために」という思いとグラウンドをほった時の体験、松代復興応援実行委員会の方の体験談などが重なり、一人ひとりが自分ごととしてマイタイムラインづくりに取り組んだ。グループの中で相談したり話し合ったりする際にも「自分の家には弟がいるから」「ぼくの家から避難所は歩いて5分だから」という声が聞こえてきた。



授業の最後に、松代復興応援実行委員会の方から防災ポーチをいただいた。児童は、いざというときに備えて、そのポーチをランドセルに入れて持ち歩いている。

マイタイムラインをつくろう！

名前 _____

1 自分の家から避難先まで、車で、約 _____ 分
徒歩で、約 _____ 分

2 住んでいる場所のしん水標定は？
標高 _____ m しん水の深さ _____ cm

3 避難所に行きついておきたいことを箇条書きに書きよう

4 防災新聞紙や防災士の話を聞いてわかったことや考えたことをここに書きよう

5 マイタイムラインをつくった振り返り書きよう



(図1 マイタイムラインを作ろう)

(マイタイムラインシール 松代バージョン)

5 学校防災アドバイザーの関わり

信州大学の内山琴絵先生と廣内大助先生には、松代小学校の防災体制について助言をいただいた。特に、災害時等の保護者への児童引渡しについては、様々な状況を想定した方法を検討していたため、臨機応変に動けるためのアドバイスをいただいた。

地域連携防災学習の内容については、内山琴絵先生から単元展開や授業の流れについて、資料や講師の紹介をしていただいた。4年生は、社会科や国語科で防災に関する学習を行っていたが、自分ごととしてとらえられるように、松代復興応援実行委員会の方の体験談を交えた紙芝居を見てからマイタイムライン作りに入っていくとよいことや、児童がマイタイムラインを作成しやすくなるよう、松代小学校にあったシールを用いて考え

るようにすると良いことを教えていただいた。また、法令出版の方を紹介していただき、授業の中で警戒レベルの説明を児童にわかりやすく教えていただくことができた。防災マップ作りは、社会科の教科書の中で発展的に取り扱われており、教師だけでも扱える学習になっているが、学校防災アドバイザーに関わっていただいたことで、地域と連携した、自分ごととして考えられる防災学習となった。

6 事業の成果及び今後の課題

信州大学の内山先生と廣内先生にアドバイスをいただいたことで、4年生の社会科や国語の学習と連携させ、毎年続けられ、かつ自分ごととして考えられる地域連携防災学習を行うことができた。

昨年度紹介していただいた猪の満水（2019年台風19号災害）災害アーカイブは、様々な学年や教科で活用している。今年教えていただいたマイタイムラインづくりも続けて活用していけるものとなった。

今後は、地域に出かけ、実際の場所と人と結びついた体験的な学習へと発展させていきたい。松代小学校の児童は、どの児童も地域の防災について学び、防災に対する知識や意識を高めていけるよう、地域連携防災学習を続けていくことが課題である。

7 まとめ

2019年の台風19号災害は、地域の方にとっては記憶に新しいが、児童の記憶からは薄れつつある。松代という地区は昔から幾度となく水害に襲われてきた地区であり、水害を遠くの出来事としてとらえず、いざというときに自分や大切な人の命を守る児童の育成は重要である。地域の方々と話をすると松代群発地震のこともたびたび話題に上り、松代地区の住民自治協議会で防災人材育成講座を開催するなど、防災意識が高い地区である。そんな松代地区にある学校として、地域に即した防災学習を継続させていくためには、児童の意識や実態から離れず、他教科と関連付けながら、無理のない学習形態を考える必要があった。今回、学校防災アドバイザーの先生方のご協力により、松代小学校の児童にあった地域連携防災学習を推進することができた。

今後も、児童の学びたい思いに寄り添いながら、地域の防災活動を担っていく児童を育成していきたい。

（文責 教頭 大橋 あゆみ）

清野小学校における学校安全総合支援事業の取組について

親子防災教室：「地域の危険箇所を調べよう」

高学年：「命を守る行動を考えよう～マイタイムライン作り～」

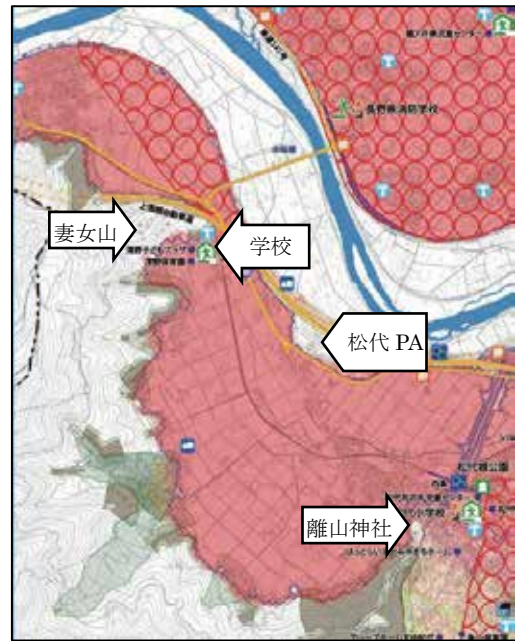
長野市立清野小学校

1 はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する1区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる2区、学校東側で大部分は平地部の3区（ともに松代町清野地区）の3地区に分かれている。児童数は22名で、徒歩で集団登下校をしている（下校については、子どもプラザ利用の児童を除く）。

学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで5～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。この地域は水害常襲地域でもあり、過去には江戸時代の『戊の満水』（1742年）や昭和57年の台風18号災害で浸水被害を受けている。なお、戊の満水の際には、学区東端のやや小高くなった部分の上にある離山神社の境内に多くの人が避難したとの記録がある。

令和元年の台風19号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難する等、有事の際には身の安全について考えなければならない地域である。



2 本校のこれまでの防災学習

令和元年度、4年生の児童が、総合的な学習の時間を利用して、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。この学習は、自分たちの住む地域がハザードマップで赤く塗られ、浸水想定区域となっていることを知った子どもたちが、周囲よりも高く安全な場所はどこなのか考えるところから始まった。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『Field On!』を利用し、危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。

令和2年度は、3年生が「洪水が起きた時の行動を考えよう」5年生が「防災マップ作り」、令和3年度は、3年生が「清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ」5年生が「清野の土砂災害について調べよう」、令和4年度は、5年生が「水害発生時に地域の方々のために状況に合わせて、自分たちはどんな行動ができるかを考えよう」、令和5年

度は、5年生が「防災博士になろう～危険を知って家族や地域と備える防災学習～」の学習を進めてきた。

本年度は、「命を守る行動」に焦点をしばって取り組んだ。親子防災教室で「地域の危険箇所を調べよう」と高学年児童が「命を守る行動を考えよう～マイタイムライン作り」を行った。

3 本年度の取組について

(1) 防災教室「地域の危険箇所を調べよう」 9月3日（火）

ア ねらい

- ・いつ起こるかわからない自然災害の怖さを知り、自分たちが毎日通っている通学路にはどのような危険があるのか、万が一の場合にはどのような行動をとればいいのか考えることができる。

イ 参加者

- ・全校児童 22 名、保護者 22 名、学校職員 11 名
廣内 大助 先生（信州大学教育学部教授・学校防災アドバイザー）廣内先生の研究室の学生



ウ 活動の概要

- ・各自、水害時に通学路での危険な場所や安全な場所についてタブレットで撮影したものを持ち寄った。
- ・持ち寄った通学路での危険や安全について、地区ごと児童と保護者で「なぜ、危険だと思うのか」「なぜ、安全だと思うのか」を考えてマップに記入し、避難するときに大切にすることを発表し合った。

エ 活動後の声

- ・千曲川に近い通学路には危ないところが多いと分かったので、これからは意識して通りたい。地震の時には、ブロック塀が崩れてくるかもしれないから、なるべく離れて歩きたいと思った。（児童）
- ・通学路の危険箇所を地区で話し合うことで、自分では気づかなかった危険なところを知ることができた。岩野地区は、昔から洪水の被害があるので、大雨の時には注意したい。身の回りの危険な場所を知ることができてよかった。（児童）
- ・大人の目線だけでなく、様々な学年の意見を聞くことで、自分では気づかなかった危険な場所を知ることができるので様々な年齢層で考え合うことが大切だと感じた。タブレットで写真を撮ってくることで、実際の場所をイメージすることができた。（保護者）



オ 今後の展望

- ・児童、保護者を交えて取り組むことで様々な年齢層で考え合うことができた。水害時には学区内に指定緊急避難場所が一つもないことを踏まえると、全員

が同じ課題意識をもって取り組むために、地域と一体となって考えるこのような機会是非常に大切である。

(2) 「命を守る行動を考えよう～マイタイムライン作り～」

ア ねらい

- ・水害発生時、命を守る行動をとるために、避難レベルのどの段階で逃げる必要があるのかを、マイタイムライン作りから考える。



イ 活動の概要

- ・長野市防災ハザードマップをもとに、水害時、自分が避難する場所を想定し、避難経路を考える。(徒歩での移動、車での移動を想定)
- ・5段階の警戒レベルと実際の天候、災害の様子画像から、とるべき行動について学習する。(児童から出された避難行動をカードにする。)
- ・自分の家の場所、避難想定場所の位置関係から、警戒レベルごとに取りべき避難行動を考える。(考える際には、避難行動カードを使用する。)
- ・地区に分かれて、避難行動を決定した理由を話しながら、マイタイムラインを発表する。

ウ 児童の様子

- ・警戒レベルの避難行動を参考にしながら、自分の家族構成や、避難想定場所までの距離から、自分はどのレベルでの避難が必要なのかを考えていた。
- ・親子防災教室で地区ごとに出された危険箇所を再確認し、避難想定場所までの所要時間を考え、避難完了から行動を逆算して考える児童がいた。
- ・警戒レベルの行動指標からマイタイムラインを一から考えることは、大人でも難しい。避難行動例のカードがあることで、天候状況や避難場所までの想定時間に合わせた避難行動を具体的に考えることができた。

エ 児童の感想から

- ・その人の状況によって避難するタイミングは違うけれど、家族の中で1番避難までに時間がかかる人を中心に避難行動に移れば、命を守ることができると思った。
- ・防災教室での危険箇所と避難経路を合わせてみると、自分の家は、危険度が高いと思った。警戒レベルの避難行動はわかったけれど、自分の家の場所だと、もっと早い避難行動が必要だと思った。
- ・災害はいつ起こるのかわからないので、あわてて避難しなくてもよいように避難道具の準備をしておくことが大切だと思った。
- ・警戒レベルの学習をして、どのタイミングで避難すればよいのかがわかった。その時の天候や警戒レベルを知ることが大切なので、災害時にはラジオやテレビの情報をしっかりと聞きたいと思った。

オ 今後の展望

- ・個々の状況に合わせて考えたマイタイムラインであるが、実際の災害時に有効であるかは課題が残る。マイタイムラインを活用するためには、避難想定経路を使っている時間計測や避難弱者の立場での避難想定など、実際に避難をしてみることが必要であると感じた。

4 終わりに

令和元年度から始まっている本校の防災学習は、これまでに「地区の危険個所」「水害について」「土砂災害について」「実際の避難行動について」と地区が抱えている課題について学習を積み重ねてきた。このことにより、清野小学校の子どもたちの防災に対する意識は高くなってきていると感じている。本年度は、「命を守るためのマイタイムライン作りについて」意識を広げることができた。

清野小学校は、年度末をもって閉校をむかえ、来年度からは全校児童が松代小学校へ通うこととなる。松代は、令和元年の台風19号災害で大きな被害を受けた地区である。近年の異常気象等により自然災害のリスクが上がっている中、自然災害は身近なものとなっている。次年度以降も「地域の自然的特徴、自然災害の危険性を知る」「自分の命を守る行動を考える」等を児童の意識に位置付けることを大切にしてほしい。

(文責 講師 長浦 宏樹)

学校安全総合支援事業の取組について

—アドバイザーからの示唆や、経年の実践から
防災学習に新たな課題を見出していく営み—

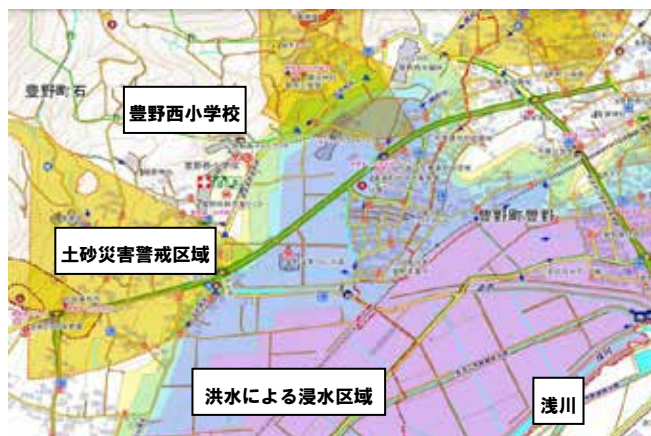
長野市立豊野西小学校

1 はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 315 名の中規模校である。付近には千曲川・浅川が流れており、長野盆地西縁断層の動きにより形成された緩やかな豊野丘陵上に校舎が建っている。令和元年台風 19 号の際は、浅川流域の氾濫原にあたる学区内の地域が甚大な浸水被害を受け、本校の体育館をはじめとした避難所等で多くの被災者が避難生活を送った。

また「ゆたかの」と呼ばれる豊野は鳥居川より引かれる石村用水が流れ、入川・隈取川・三念沢・権現沢をはじめとした多くの川や沢が流れる水の恩恵を受けている土地である。同時に、学校周辺は土砂災害警戒区域にあたる箇所が多く、土石流や地滑りに対する備えも必要とされている地区でもある。

豊野丘陵に建つ豊野西小学校



2 長野市立豊野西小学校の防災体制の取組

豊野地区三校（豊野中学校・豊野東小学校、本校）で連携しながら、学校防災アドバイザーである信州大学教育学部廣内大助先生・内山琴絵先生に御指導いただき防災教育の改善を図ってきた。児童が安全に気をつけて生活できる態度を養い、応急の場合にも迅速な判断をし、安全に行動したり避難したりできる態度を養うことを目指して、年 3 回の避難訓練や職員研修等の実践を重ねてきた。豊野三校教務主任会を中心にして検討・立案して行われた「豊野三校合同引渡し訓練」、共通教材を用いた「防災教育カリキュラム」による防災タイムラインの作成・見直しなどの実践を重ねてきている。

3 本年度の取組について

- (1) 課題を明確にして防災教育活動を展開するための、学校防災アドバイザーとの懇談
ア ねらい

年度後半の防災教育活動を前に、本校のこれまでの取組の成果と課題について共通の基盤に立って推進できるよう、懇談の機会をもつ。本年度から教頭、教務主任（防災教育主任）が新任であることから、経年の取組を指導していただいている学校防災アドバイザーに過年度までの実践についてお話をお聞きする機会とする。

① 8月6日（火）14:00～16:00

② 10月25日（金）16:00～17:00

イ 参加者 本校職員（教頭、教務主任、防災教育主任）2名

支援者 信州大学教育学部特任助教（学校防災アドバイザー）内山 琴絵先生

ウ 教えていただいたこと・本校の防災教育活動に生かしていくこと

- ・ 1学期の避難訓練の反省から、さらに避難時の実際を細かく想定した訓練の工夫について御示唆をいただいた。「体育館での放送が聞き取りにくかった」という反省が出されていたが、ここから「避難時に放送機器が使えなかった場合はどうしたらいいか？」という訓練の可能性も見出すことができる。



児童や教職員の反省から、より実効性のある避難訓練の工夫を今後も見出していく

- ・ 避難訓練については、活動の振り返りの視点を児童に与えて、1回1回の訓練の経験を次の段階につなげていく指導を継続していくことの重要性について教えていただいた。低学年であれば「自分の命を守る行動を取ることができたか」高学年であれば「避難開始から完了にかけて常に共助の視点をもって行動することができたか」。
- ・ 防災学習を体系的に進めるための視点を教師がもち、年間の計画を履行していくことを、今後の課題点として教えていただいた。

エ 職員研修（11月18日（月）15:30～16:50）で教えていただいたこと・本校の防災教育活動に生かしていくこと

- ・ 係、管理職対象の懇談のみならず、校内の教職員が授業改善に役立てていけるよう、職員研修を計画した。
- ・ 学校防災アドバイザーと連携し、防災管理・防災教育の両面から、危機意識をもち続ける教育活動を推進していくこと。
- ・ より実効性のある避難訓練の工夫の余地はまだあること。
- ・ 学校安全総合支援事業の活用、マイタイムラインの作成を通じた防災学習、児童の地域における防災意識の高揚を支援するアプリケーション「Field On!」の活用、防災教育の今を把握するための知見（資料や身近な取組など）についての説明をいただいた。



防災教育の新たな知見を教えてください

(2) 学校防災アドバイザーによる授業

(①11月18日(月)全校防災教育講演会 ②12月4日(水)高学年児童対象の授業)

ア ねらい

これまでの本校の取組の経緯を踏まえ、その成果と今後の課題を明らかにしていくための具体的な支援をいただく機会とする。

イ 参加者 全校児童・教職員 18 名・その他 1 名

支援者 信州大学教育学部特任助教（学校防災アドバイザー）内山 琴絵先生

ウ 教えていただいたこと・本校の防災教育活動に生かしていくこと（講演の内容）

- ・能登半島地震は他人ごとではない。長野市の内陸部でも震度 6 以上の地震の発生確率があり、家屋倒壊や土砂崩れが懸念されており、豊野地区も地質が新しくもろいため、地震や雨で崩れやすいという特徴をもっていることを知ってほしい。



高学年の児童を対象とした学校防災アドバイザーの授業

- ・そうした状況の中で自分たちが出来ることを、普段の学習から身に付けていきたい。学校で、登下校の途中で、またいつどこにいても「これが一番安全だと思える行動」がとれるようにしていきたい。
- ・水害が起きた時には「逃げる」ことがまず自分たちのすることであり、どう逃げるかを学習経験から学んで、お家の人とも話し合っておくことが大切である。
- ・「水害が起きる前に、学校から家に帰ります。授業はそこで終わりにになります。お家の人と帰ります」という水害が起きた際の基本的な姿勢を示した上で、垂直避難（今いる建造物の階上に上って避難する考え方）よりも水平避難（今いる建造物を離れて水害の起きない安全な場所へ避難する考え方）を可能な限り優先させること、垂直避難は最終手段であること等を教えていただいた。
- ・神代断層地震では死者が出なかった事実から、地域の人との助け合いがいかに重要かを学んでいきたい。実際の避難所では小中学生が自ら行動に移して、より多くの人が安心して避難生活を送れるように力を発揮している例がある。助け合うこと、思いやることは、避難生活でも生きるものであるというお話をいただいた。

4 学校防災アドバイザーとの関わり（上記以外）

(1) 8月29日(木) 14:00～17:00

信州大学教育学部特任助教

（学校防災アドバイザー）内山 琴絵先生

- ・豊野三校 安全防災教育の連携について
（三校引渡し訓練の実践を通して）



- ・参加者 全校児童・学校職員 18 名
保護者 226 名 市教委 1 名

5 まとめ

本校の防災体制や内容について信州大学の内山琴絵先生より御指導をいただいていた。児童や教師が、防災という角度から地域や自分の生活を俯瞰する視点を与えていただいた。そうした視点には過去の災害事象で生かされた知見があり、具体的な防災活動の蓄積から生まれてきていることを教えていただいた。児童にとっては、これからの防災学習に自分ごととして取り組む足掛かりとなった。専門家の先生方のご指導をいただいたことに感謝し、今後も地域との連携を深めながら本校の防災体制をより充実したものにしていきたい。



三校引渡し訓練の様子

(文責 教頭 目黒 哲朗)

学校安全総合支援事業の取組について

長野市立豊野東小学校

1 はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 131 名の小規模校である。近隣には千曲川、鳥居川、浅川が流れており、令和元年 10 月の台風 19 号による千曲川の氾濫の際は、学区内で床上・床下浸水の被害を受けた家庭があった。本校体育館は避難所となり、多くの被災者が 2 ヶ月ほど避難生活を送ることとなった。

このような本校の立地からも防災教育の充実が必須であると考え、「学校防災アドバイザー活用事業」を中核とした教育課程の改善を図っている。今年度も、豊野地区 3 校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）の連携を重視して防災教育に取り組んでいる。

2 豊野東小学校の防災体制と昨年度までの取組概要

「児童が自らを災害から積極的に守るため、災害に対する理解を深め、望ましい態度や習慣を身につける」ことをねらいとして防災体制を整えている。火災、地震、風水害等の災害の危険から児童を安全に避難させるために、地震や火災を想定した避難訓練のほか、大雨のため近隣の川の水位が上昇し、危険が迫っていることを想定した引渡し訓練を豊野地区 3 校と連携して実施した。

また、台風 19 号による災害を教訓とし、令和 4 年度より学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）の御指導を受け、自分の住んでいる地域にどのような危険があるか知り、災害に備える大切さを学ぶことをねらいとして、高学年児童一人ひとりの防災タイムライン作成や、職員研修、地域と連携して引渡し訓練を実施し、児童や職員の防災の知識・理解・技能の向上を図ってきた。

被災当時のことが風化されていく中で、10 年後、20 年後まで、どのように児童や職員の意識を持続させ、防災意識を高めていったらよいかという課題が残された。

3 学校防災アドバイザーの関わり

学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生と連絡を取り合い、今年度の防災教育の推進について打ち合わせ、以下のことをお願いした。

- ・ 3 校合同引渡し訓練への参加と事後指導
- ・ 高学年児童への授業の実施
- ・ 職員研修の講師依頼

(1) 3校合同引渡し訓練

3校合同引渡し訓練に合わせて来校いただき、訓練開始前から終了後まで参観いただいた後、以下のような事後指導をいただいた。

- ・ 1、2年生も迎えが来るまで、落ち着いて待つことができた。
- ・ 引渡しの手順を掲示したり、机の上に置いておいたりしている学年があり、どのようなやり取りをするのか、保護者がどのように動けばよいのかわかるように工夫されていた。
- ・ 実際は学校が避難場所になることもあり渋滞が心配されること、悪天候の中では視界がなくなるため、子どもたちの姿が確認しづらくなることを保護者に知ってほしい。歩道橋下の駐車は危険。やめさせたい。
- ・ 避難所となったときの車の誘導をどのように行うのか、地域、保護者、学校で考えた。
- ・ 本来は、緊張の中の待避になるため、子どもたちも不安になりどのような行動をするかわからない。児童の姿を見失うことがないように、教室の出入りは「行ってきます」「もどりました」を担当に伝えて行うように徹底したい。
- ・ 不安を解消するために、学年に応じて、普段通り（その子がリラックスできること）をして待てるとよい。
- ・ 引き渡されたが帰ってこないという状況も考えられるため、何時ごろ学校を出たのかという時刻や、だれが引き取ったのかという記録は大切。引渡し後の混乱を招かないためにも記録してもらうことがよい。
- ・ 引渡し相手は、御近所や知り合いなど、迎えを行う可能性のある人はできるだけ大勢書いてもらうようにしたい。
- ・ メールは、普段から開封確認の習慣をつけたい。
- ・ 事前の通知を出しすぎることによってかえって確認をしない保護者の様子も受け取れる。突然の訓練ができれば一番良い。「通知は1回。日だけ伝え、時刻は当日のメールで確認する。」などの工夫ができるとよい。
- ・ 「高齢者等避難」には子どもたちも含まれる。警戒レベル3から4になった時点で避難を始めたい。
- ・ 保護者は、学校から自宅、仕事場から学校までのルートや時間を確認し、引渡し後、安全に帰ることができるようにしたい。

今年度は、子どもたちの意識を高めるために、訓練日の朝の活動で、災害を経験された地域の方をお招きし、校長との対談形式で当時の様子をお聞きする機会を設けた。また、被災当時の6年生の資料を掲示し、子どもたちが感じた当時の大変さや教訓を伝えることができた。訓練の実施にあたっては、職員の意識を高めるために、係分担の明示や、引渡し実施を確認する職員連絡会を位置づけた。訓練終了後には、全職員で本間先生の御指導を受け、反省点を共有することができた。

掲示：防災コーナー



保護者へ引渡し



(2) 高学年の授業

9月25日には4・5・6年生を対象に、災害時の行動やタイムライン作成のポイントなど、以下の内容について授業をしていただいた。災害に備える意識を高め、具体的な方法を考えることができた。



4年：自分たちがつくったタイムラインが命を守るものになっているのか、ポイントを教えていただき振り返ることができた。

また、水深50cmでは、どの程度危険なのか、動画等で見せていただき、水の怖さを改めて知ることができた。

5年：昨年度つくったタイムラインの見直しの仕方・ポイント等を御指導いただいた。風水害だけではなく、土砂災害、地震災害等、身近な災害について、気を付けておくべきことや備えについて学ぶことができた。

6年：自分たちにできることや、災害に強いまちづくりについて大切なことを考えるきっかけとして、災害時に避難するまでの様子や、実際の避難行動の様子、避難所での生活の様子、復興に向けた取り組みなど、具体的なケースについて学ぶことができた。

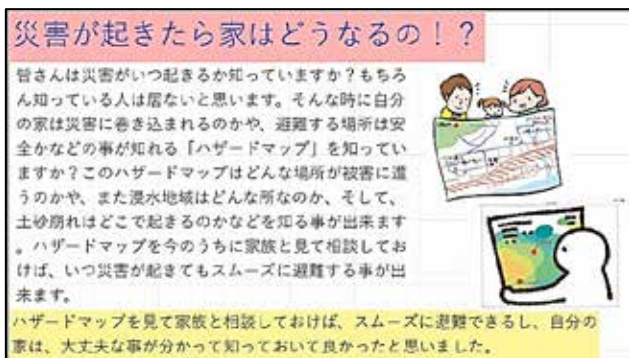
(3) 職員研修

10月23日、本校職員を対象に、過去の災害の様子や安全対策、避難行動、タイムラインの必要性や情報収集の方法、防災教育に有効な教材などについて、資料をもとにお話しいただき、職員の防災意識向上につなげることができた。

4 その他の取組

(1) 防災授業

7月下旬～8月下旬に、全学年が生活科、総合的な学習の時間において防災教育の授業を行った。1・2年生は「防災って何?」、3年生は「自分の命を守るには」という内容で、4・5・6年生は、「災害の種類と気を付けることを知り、自分にできることを考える」というテーマで、ハザードマップを用いて台風や地震などの災害による危険性を考え、もしもの時にはどう行動すべきかタイムラインの作成や見直しを行った。



みんなに伝えよう防災のこと（防災教育のまとめ）

(2) 避難生活体験学習

避難生活における「段ボールベッド」や「簡易トイレ」、「安否伝言ダイヤル」などの体験を通して、避難所生活をイメージしたり、自分にできることを考えたりすることができた。



5 事業の成果および今後の課題

(1) 成果

学校防災アドバイザー本間喜子先生の御指導を受けながら、子どもたち及び職員が防災についての知識・理解を深めることができた。さらに今年度は、本間先生の御指導を中核とし、避難所での生活の様子を学ぶ機会へとつなげることができた。今後も子どもたちが自分で防災タイムラインを作成、更新することや、避難生活になったときに自分にできることを考える実践力の育成につなげていきたい。また、教えていただいた防災教育に関するアプリなどの情報を活用していきたい。



豊野地区3校や地域との連携について、各校の学校防災アドバイザーの御指導のもとに合同訓練を継続して実施できたのは大きな成果である。

(2) 課題

3校合同の引渡し訓練も3度目となり、保護者の中には慣れが見え始めてきた。職員や児童の防災意識を高めていくだけでなく、保護者の意識を高めていくためにどのような働きかけができるか、引き続き学校防災アドバイザーに御指導いただきたい。

豊野3校それぞれの防災教育に関するカリキュラムの記録を残し、小学校から中学校へと防災教育を積み上げていきたい。

台風19号による被害から、引渡し訓練の設定は水害となっているが、本校は土砂災害の危険性も大きい。多種多様な災害に対応できるように準備しておきたい。

6 まとめ

令和元年の台風19号による災害を教訓とし、自校の防災体制や教育内容を再構築しようと、本支援事業で信州大学の本間喜子先生から御指導をいただいている。豊野地区3校による合同訓練を、反省点を踏まえた上で継続できたのは、御指導のおかげである。児童の命や生活を守るという最も大切な点について、専門家の御指導や地域との連携の必要性を強く感じる。本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

(文責 教諭 中谷 玲子)

学校安全総合支援事業の取組について

— 保育園・小学校・中学校と地域の連携・協働ですすめる防災学習 —

長野市立戸隠小学校

1 学校の概要

(1) 立地

長野市立戸隠小学校（東経 138 度 15 分 北緯 36 度 70 分 標高 910m）

(2) 世帯数と生徒数

ア 15 地区・世帯数 1,413

（「令和 6 年（2024 年）長野市町別人口及び世帯数 7 月 1 日現在」より）

イ 戸隠管内人口 2,999 人（男 1,484 人 女 1,515 人）

戸隠管内での年少人口（0～14 歳）189 人 6.3% 60 歳以上 1792 人 59.8%

（「長野市地区別年齢別人口 令和 6 年（2024 年）7 月 1 日現在」より）

ウ 戸隠小学校児童数 81 名（男 42 名 女 39 名）

(3) その他

- ・戸隠地区は「ハザードマップ」（長野市総務部危機管理防課 H30 年 3 月発行）で、多くの箇所で土砂災害警戒区域、特別警戒区域となっている。
- ・戸隠地区主要幹線道路のほとんどで、地滑りやがけ崩れの危険が顕在している。

2 戸隠小学校の防災体制について

- (1) 火災や地震に対する年間 3 回の避難訓練を行っている。うち 1 回（11 月実施）は、校庭が積雪で使用できないことを想定し、避難場所を昇降口前とした避難訓練を行う。また、1 回は、「引渡し訓練」（詳細は下記）を行っている。
- (2) 近隣の戸隠中学校と連携し、ハザードマップやタイムライン等の学習を行っている。

3 学校防災アドバイザーの関わり

※下記、字幅の関係で、本紙面では「引渡し訓練を含めた避難訓練」を述べる。「タイムラインの学習」については、戸隠中学校を参照。

(1) どのような支援を受けたいと考えたか

とがくし保育園、戸隠小学校、戸隠中学校合同での「引渡し訓練」（年 1 回実施）は本年度で 4 回目である。学校近隣は道路が狭く、保護者への引渡し時に困難が想定される。その際の道路での状況や学校での保護者への引渡し方について信州大学教育学部特任教授榊原保志先生（学校防災アドバイザー）を迎え今後の支援を受けたいと考えた。

(2) 学校として取り組んだ内容

ア 地震を想定して避難

保小中で時間を合わせ、同時刻で地震を想定した訓練を行う。

小学校では、各教室で地震発生時の初期対応、体育館への避難訓練を行なう。子どもたちは、避難時の合言葉「おはしも」を守り、静かに体育館に避難した。保育園、中学校も同様にそれぞれの指定した避難場所に避難している。



非常ベル後、机の下に避難（小学校）



体育館に全校・全職員避難（小学校）

イ 引渡し事象を想定しての保護者引渡し

引渡しの際は、保護者が中学校、小学校、保育園の順で自分の子どもを迎えに来る。戸隠の道路状況を鑑み、自家用車での送迎に備え、周辺道路を一方通行とし、交通障害を減らすことを事前に保護者に告知した。

小学校の昇降口での迎えの車の場所等に関しても、昇降口前での車の混雑を避けるための職員が誘導等を行った。



体育館で児童と保護者を対面確認（小学校）



引渡し訓練後、保護者と下校（小学校）



体育館に避難（中学校）



生徒を保護者に引渡し（中学校）

ウ 児童・生徒の受けとめ

地震想定避難訓練、引渡し訓練を児童（・）生徒（○）は下記のように受けとめた。

- ・落ち着いて静かに、あせらずやるのが大切だと思った。すばやく動いて、みんなで協力することも大切だと思った。下の学年の人たちを守ってあげて、みんなで命を守る。あせっちゃうかもしれないけど、なるべく落ち着こうと思った。
- ・今日の防災教育で地震が来るということが分かっていたから思った通りに行動ができたけど、本当に地震が来るときはいつくるか分からないので、そのときにすぐ対応できるようにしておきたいです。今日はとてもいい経験になったと思う。
- ・しずかに行動できたし、待っていられた。先生の言うことをよく聞いた。
（保護者が）早く迎えに来てくれたけど、実際は、そんな早く迎えに来れないから、しゃべったりしないように、がまんしたい。本当にあった時は、今日の訓練の時みたいな行動をしたい。
- ・もし、災害があつて、引渡しになっても、どうすればよいか分からなくなならないように訓練ができてよかったです。本当に引渡しになったら、静かにして親を待つということが分かりました。もし本当の引渡しがあつても、ちゃんとできるようにしたいです。

○いつ災害が起こるか、どこで地震がおき、その時自分はどこにいるのかは、その時になってみないと分からないことが沢山あるから、今日の防災教育で、本当に起きたようにできたから、もし本当に災害が起きてしまったとしても落ち着いて避難をしたい。

○今回は、大地震を想定しての訓練だった。急に放送が鳴って、正直焦ったけど落ちついて行動を取れた。万が一本当の災害が起きても落ちついて行動したいと思った。

エ 防災アドバイザーからの助言

榊原保志先生（学校防災アドバイザー）からは、主に下記の助言をいただいた。

- ・保小中連携しての避難訓練はとてもよい。継続してほしい。
- ・訓練はショーではない。本当に災害があつた時に備えて、基本的な避難の形を子どもたちや先生方、保護者と共有することが大事。
- ・戸隠という環境を考えると、冬などの状況が悪いときに訓練を行ない、その時の対応を考えておくことも必要。

4 事業の成果及び今後の課題とまとめ

「命を守る」という点で保小中のそれぞれの立場の先生方が、係を中心に事前に丁寧な打ち合わせを行ない、連携を図った。「先生方も、子どもたちもねらいを理解し、落ち着いて行動していた」などの感想が出た反面、保小中の兄弟関係等で迎えの車をどこに移動したらよいかという今後の課題も出てきた。

また、今後の防災教育に関して、榊原先生の助言からは大切な視点をいただいた。

課題や榊原先生からの助言を活かし、「命を守る」私たちの訓練として、訓練だけでなく日々の活動にも活かしていきたいと感じている。

（文責 教諭 新井 清規）

学校安全総合支援事業の取組について

—生徒自身が、自ら判断し身を守ることができる防災教育をめざして—

長野市立篠ノ井東中学校

1 はじめに

篠ノ井東中学校は長野市の南部に位置する全校生徒およそ 370 名の中学校である。近隣に 1998 年の冬季オリンピックで開閉祭式に使用されたオリンピックスタジアムがあり、学区内にしなの鉄道と篠ノ井線が交差する篠ノ井駅と、高速 IC などが整備されている交通の便利な地域である。自然も豊かであり、北には飯縄山、西には北アルプス、南に冠着山が望める。そして本校のすぐ東には豊かな水量を有した千曲川が流れている。

普段は大らかな千曲川ではあるが、令和元年度の台風 19 号の際には各所が決壊し、浸水の被害をもたらした。本校も校庭、駐車場など床下浸水の被害があった。自宅が床下浸水及び床上浸水などの被害を受け、避難所に避難した経験をもつ生徒も多数いる。

2 篠ノ井東中学校の防災体制について

【過去数年間の避難訓練の状況】

- ・年間 3 回の避難訓練を計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行と猛暑による対策により、極力訓練を省略せざるを得ず、③の訓練を行わず訓練を 2 回に減らし、内容も簡略化して実施する状況が数年続いた。

- ①火災を想定した学級担任誘導の避難訓練
- ②地震を想定した教科担任誘導の避難訓練
- ③火災を想定した事前予告なしの避難訓練

【防災対策について見直す】

- ・台風 19 号被害の経験から、水害に対する危機感があったものの、具体的な対策については検討している段階であった。令和 5 年度から浸水被害を想定した避難訓練についての取組を始めた。そこに令和 6 年 1 月の能登半島地震が起こり、水害だけでなく地震をはじめ、あらゆる防災対策を検討することになる。

【令和 5 年度 年 3 回の避難訓練の実施】

- ①火災を想定した学級担任誘導の避難訓練
- ②浸水を想定した篠ノ井地区の避難について講話及び地区ごとの集団下校について
- ③地震から火災が起こる想定で教科担任誘導の避難訓練

【避難訓練以外での取組】

- 2 学年において総合的な学習で防災について学ぶ

- ・現在の 2 学年生徒が 1 年次だった令和 6 年 1 月に能登半島地震が発生した。現地の被

害状況を伝える報道を受け、学級長会から「自分たちに何かできることはないか」と提案があり、総合的な学習の時間などを利用し防災について学習し始めた。

【令和5年度 1学年生徒の活動】

○3学期学級長会において、自分たちが被災地に対して何かできることがないだろうか提案がある。

- ・被災地の被害状況を調べる。
- ・年度末のため、学級長会の提案を次年度へ引き継ぐ準備をし始める。

【令和6年度 2学年生徒の活動】

(能登半島地震から台風19号災害について)

○5月13日(月)

- ・学級長会から、能登の被災状況を調べたレポートの発表
- ・防災体験講座の実施
「防災クイズ」
「被災地支援に関わって」
「長野市危機管理防災課の方の講演」
- ・被災地応援メッセージ作成

○8月20日(火)

- ・職員研修(防災研修)
「気象庁ワークショップ」

○8月30日(金)

- ・出前講座(長野市危機管理防災課)
- ・篠ノ井中央公園の防災倉庫見学(雨天のため延期)

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 避難訓練事前指導

ア 実施日 7月31日(水) 10:00～

イ 指導・助言

- ・水害時の避難訓練について
- ・3年スパンでの避難訓練計画について
- ・今年度計画している避難訓練について

(2) 避難訓練参観・事後指導

ア 実施日 9月5日(木) 第3校時

イ 指導・助言

- ・生徒の記入した避難訓練の「感想・反省」を職員生徒で共有することが大切。
- ・ひびの入った校舎に職員が捜索に入る想定には疑問があるので今後検討する必要がある。実際にはそのような状況になる前に、職員の「追い出し・確認」のルールを決め徹底する。職員が何をするのか事前に手順を定め徹底すれば不明者を出すリスクは軽減する。
- ・職員係活動での内容も報告する。けがなどの情報をトランシーバーなどでやり取りできるとよい。



- ・音楽室など特別教室での避難のルールが徹底していた。(机のない部屋で、頭を守る。窓から離れる。部屋の後ろに集まるなど)
- ・今回の避難訓練では、生徒・職員がパニックにならないように、従来の避難訓練から大幅に変更することはなかったということだが、計画した3年スパンでの訓練に沿って、様々な想定を取り入れて積み重ねるとよい。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

- ・今回の事業におけるアドバイスで水害避難のポイントを確認でき、水害における避難を想定した際の注意点や疑問点が解決した。
- ・緊急事態での職員の動きを確認することができた。また職員が少人数であった場合の対応策などの課題点も浮き彫りになった。
- ・今回の事業に参加することで職員の防災に対する意識が変化し、3年スパンで実施する計画を取り入れる良い機会となった。

(2) 課題

- ・中学校におけるタイトな年間行事計画のなかで、日程的に避難訓練を行う厳しさが浮き彫りとなった。
- ・あらゆる災害を想定すると、地震や水害の避難だけでも「負傷者への対応や保護者への連絡引渡し」等行うべき想定が多数ある。3年間スパンで訓練を行うとしても、内容の絞り込みが難しい。

5 まとめ

今年度、本事業に参加することで防災対策の見直しを行うことができた。本校は令和元年における台風19号被害に遭ったにも関わらず、コロナ禍や猛暑の対応に追われ具体的な訓練を行うことができずにいた。その点は多くの職員が危惧していたことであった。

振り返るとこの一年は危機管理に関してもう一度見直すというスタートであった。目指す姿である「生徒自身が、自ら判断し身を守ることができる」に対して現段階では、まだスタートに立ったところであるが、今後3年間のスパンであらゆる想定での訓練を重ね、職員はもちろん、生徒からも「〇〇が起きたとき、自分はどうする?」「いざという時のために何が必要?」といった意見を出し合い、話し合うことを通して、安全のために自ら考えて行動できる生徒の育成を目指していきたいと考えている。

今年度の能登半島地震と本事業は「災害はいつ起こってもおかしくない」という前提で防災対策を見つめ直す機会になり、特に職員間で共通の危機認識をもつことにつながった。今後も全職員で備えることで生徒の安全を守ることに繋げていきたいと考えている。

(文責 教諭 風間 賢一)